

第1回岡山市基本政策審議会の結果について（主要発言要旨）

1 新たな総合計画の策定について

- ・不確実性が高まる中では、長期構想（仮称）の10年間は適当なスパン。その10年間に基本に想定しつつ、テーマに応じ、その先を見据えた議論も行う。
- ・市民、民間企業、行政が、実行段階で各々の責務を果たせる総合計画とするためには、策定段階でより多くの人に参加し、各々が果たすべき役割について、しっかりとすり合わせをしていくことが重要となる。
- ・必要に応じ、テーマ別に深く議論する手法も検討する。
- ・審議にあたって、まずは大きい夢を語るころからスタートするのが一番良い。そこから先は、実現可能性や持続可能性があるかどうか、重要なファクターとなる。

2 魅力と課題、どのようなまちを目指すべきか

[まちづくり全般]

- ・岡山は大変住みやすいまちだが、物足りないという感もあり、何か1つ「日本一」がほしい。
- ・都市間競争の時代の中では、住む人が「すごい。」と感じられるまちづくりをしない限り、他都市に人を取られる。芸術家、経営者、ITマネージャーなどの専門家が多く住むまちを目指すべき。また、他のまねをするのではなく、差異化ができたまちを創り上げないといけない。
- ・岡山大都市圏は多極分散型で都市の力強さが今ひとつ。吸引力があり住みやすい都心部をつくることが重要で、集約型の都市づくりを進めていくべき。
- ・公共交通網を整備し、近隣からのアクセス性の向上と中心部の回遊性を高めることが重要。
- ・今後の日本のまちづくりのキーワードは、災害に強いこと、高齢者・障がい者などの弱者が暮らしやすいことである。
- ・岡山の気候と風土は、高齢者の住みやすさという面で他の県や都市にはないもの。高齢者が集まり、若者も高齢者をリスペクトするようなまちづくりを目指しては。
- ・人口減少・高齢化問題に対応できる地域社会をつくるため、高齢者をはじめ、全ての人に居場所と役割をつくり、地域生活を支える様々な組織や人の連携を進める必要がある。
- ・人が人と結び合い、もう一步近づき、もう一言、良い意味で余計な声を掛け合う精神風土づくりが必要。
- ・行政に経営学の観点を取り入れ、顧客の意見を入れるよう調査していくべき。きちんとしたプロセス、PDCAを入れてほしい。

[市民協働・E S D]

- ・市民が一緒になってまちのことを考えて、それぞれが責任分担して自分の役割を果たしていくような地域づくりの体質ができてくれば、岡山の持つ資源を最大限にかせる。
- ・公民館を拠点とする市民協働のまちづくりの仕組みがE S Dに関するユネスコ世界会議で岡山モデルとして高く評価されたが、それをもっと強化していく必要がある。
- ・E S Dは広範囲な課題に対応し得る考え方であり、政策の基本的観点の一つに取り上げ継続すべき。

[国際性、多文化共生]

- ・岡山市クラスの都市はグローバル社会の中で認知されるような斬新な取組も必要。E S D、産業、交通等の様々な面で先進的な取組をするべき。
- ・少子・高齢化により低下する労働力を補う観点から、女性、高齢者、外国人が注目されており、多文化共生の社会づくりを推進するべき。

[教育・子育て、若者、女性]

- ・教育問題については、学校教育も重要だが、家庭教育に非常に問題がある。子どもが朝食を食べて、学校に行く、しつけをするといった取組を家庭と地域とで協働して進めていくことが重要。
- ・社会に開かれた形で学校が子どもたちを地域とともに育てていくことにより、地域課題を創造的に解決できる人材を育てていくべき。
- ・少年や青年期の人たちにとって、魅力のある教育・文化や、就職のきっかけになるようなものを提供できるような仕掛けをつくれれば、家族とともに岡山市民として定着する人も増えるのではないか。
- ・女性が住みやすく、安心して子どもを産み育てられる環境を整えるべき。
- ・女性の力が最大限に発揮されるまちづくりについては、まだまだ耳障りのいい言葉が並ぶだけで過ぎている部分があり、これを実質化していくことが重要。

[健康・医療・介護]

- ・高齢者の健康寿命を延ばすには、運動と栄養のバランスに加えて、社会参加が重要であり、それを促す仕組みづくりが必要。
- ・地域保健、学校保健、産業保健が、切れ目なく繋がる総合的な健康づくりの仕組みを構築するべき。
- ・医療・介護分野で日本一になるポテンシャルが十分ある。医療・介護の体制充実とまちづくりをどのように繋げるかが課題。